

植物の写真をうまく撮る際の‘役に立つかわらない’覚書 其の六の其三

レンズの性能 第71号でレンズの構成について述べるとともに、この覚書の次号にて写真とレタッチについて述べたいと報告した。しかし、第71号にて述べておくべき重要な項目を記載していなかったことに気付いたことから、ここであえて其の三として述べたいと思う。興味のない人にはいささか呆れるようなことではあるが、当方にとっては饒舌になりやすい話題ゆえ、ここはその点をお許し願いたい。

Carl Zeiss 社の Otus 1.4/55¹⁾については、その価格もさることながら、老舗の Carl Zeiss 社が他社の追従を許さないとした信念でもって設計したレンズゆえに性能がよいことは間違いない。その Otus は MF（マニュアルフォーカス）のレンズだが、今の時代のレンズとして、AF（オートフォーカス）がない MF だけのレンズで、かつ、高額なのは、それなりに相当の意味があるのである（実際は使ってみたいが、とても買えない...）。ただし、驚くべくこととして、この特別に性能のよいレンズは、実は日本の

レンズ会社が製造を行っている。その社名を Cosina²⁾という。カメラやレンズに詳しい

人で、この Cosina 社を知らない人はいないとは思いますが、今やとても貴重なメーカーのひとつである。詳細は参考書³⁾に委ねるが、レンズとレンジファインダーカメラ（光学視差式距離計が組み込まれており、距離測定に連動して撮影用レンズの焦点を合わせられるカメラ⁴⁾）を中心に製造を行っている会社である。個人的には同じレンズメーカーと括られている Sigma 社⁵⁾とともに、こだわりがあって、好きなメーカーのひとつである。

レンズの性能を表す指標として、MFT（Modulation Transfer Function）がある。MFT とは、被写体のある部分がもつ光を、撮影される画像の対応する位置にどれだけ正確に集められるかを

示す値であり、豊富な階調をどれだけ表現できるかという能力を示す³⁾。ちなみに MFT は、Carl Zeiss 社が提唱したものである。この MFT は、レンズ性能として現在ほとんどのレンズに固有の表があり、レンズの性能を知る現在の最も有用な指標でもある。Otus 1.4/55 の MFT を図に示す。MFT の見かたは Canon 社に分かりやすい内容⁷⁾が記載されているが、10 本/mm の MFT 特性が 80 以上（表によっては 0.8 以上）あれば、優秀なレンズとされている。Otus は図にあるようにもちろんそうである。

次回こそ写真とレタッチについて述べたい... が... (●—▽—●;)ゞ。

1) http://www.zeiss.co.jp/camera-lenses/ja_jp/camera_lenses/otus/otus1455.html（閲覧：2015.7.7）

2) <http://www.cosina.co.jp/>（閲覧：2015.7.7）

3) ツァイス&フォクトレンダーの作り方：ガンダーラ井上 著. 玄光社, 2015.

4) <https://ja.wikipedia.org/wiki/レンジファインダーカメラ>（閲覧：2015.7.7）

5) <https://www.sigma-photo.co.jp/index.html>（閲覧：2015.7.7）

6) [http://www.zeiss.co.jp/content/dam/Photography/new/pdf/en/downloadcenter/](http://www.zeiss.co.jp/content/dam/Photography/new/pdf/en/downloadcenter/datasheets_otus/otus_1455.pdf)

[datasheets_otus/otus_1455.pdf](http://www.zeiss.co.jp/content/dam/Photography/new/pdf/en/downloadcenter/datasheets_otus/otus_1455.pdf)（閲覧：2015.7.7）

7) <http://cweb.canon.jp/ef/knowledge/index.html?id=json>（閲覧：2015.7.7）

植
い
き
新
聞



植物いききサークル

第74号

発行者:犬丸